

大村益夫訳『金学鉄文学選集 1 短篇小説選・
たばこスープ』を読みながら

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028160

大村益夫訳『金学鉄文学選集 1 短篇小説選・ たばこスープ』を読みながら

南 富 鎮

1 嬉しい贈物

コロナ感染症が猖獗し、日本中が騒然としている今年の1月初めに大村先生から『金学鉄文学選集 1 短篇小説選・たばこスープ』（以下、金学鉄短篇小説選と呼ぶ）が送られてきた。封を開けると、赤と黒を黄金比で割ったような装幀はじつに単純明快で力強く、題目を目にした時にはとても嬉しかった。嬉しい理由はいくつもあった。その理由こそ本書の性格と深く関わると思うのでそれを述べることにしたい。

まず送られたタイミングである。金学鉄短篇小説選が送られた時に私はちょうど張赫宙『開墾』を読み終えようとしていた。コロナ禍の年末年始に、以前に読み落としていた張赫宙の『人間の絆』3部作を読み上げ、次に『幸福の民』『曠野の乙女』を読み終え、ようやく『開墾』の終盤にさし掛かっていた。張赫宙の戦前の作品を読むとどうしようもない息苦しさが残る。植民地期の朝鮮人の生活と思想が透けて見えるからである。私が

少年期や青春期に目撃した風景と現実が、酷似した人間などが作中に蠢いており、しばしば既視感に捉えられる。張赫宙小説の中の登場人物が私の記憶の中の実在人物と重なり合って動き出すのである。これは小説を読む感動でもあろうが、その分、そうだからこそ、とても息苦しくもなる。現実のどうしようもなさにしばしば憂鬱にもなる。ちょうどそうした憂鬱感がピークに達した時に金学鉄短篇小説選が送られてきたのである。綺麗な装幀の本を手にとってみると、あたかも芥川龍之介「蜜柑」や梶井基次郎



「檸檬」での「私」のような感覚になる。そのような一時の息抜きで翻訳集を手に取り、なんとなくページをパラパラとめくった。

ほとんど読まれることもないと思われるが、張赫宙『開墾』は朝鮮人満州開拓移民を扱ったものである。世間一般的にいわれる国策文学に属するものとされている。しかし張赫宙文学の大概がそうであるが、これがまたじつに厄介なものである。国策的な立場からするとこれほど慇懃無礼な作品はない。国策的にはなに一つプラスにならないであろう。しかしかにも国策小説の顔をしている。ほかにも朝鮮人満州開拓を扱ったものに『幸福の民』『曠野の乙女』がある。

『開墾』は万宝山事件を扱ったものであるが、実地調査が極めて精緻かつ丹念で、万宝山事件をこれほど客観的に公平に叙述した作品や記録はないであろう。



万宝山に定着するまでの朝鮮農民の放浪、民族左派と民族右派による対立と抗争、朝鮮農民へ理解を示す中国人農民の存在、日本軍の介入に戦々恐々とする軍閥政府や中国人農民、日本軍を頼りに耕作地を強引に確保しようとする朝鮮農民の欲望などが綿密に描かれ、作品を読むにつれて中国農民がじつに可哀そうにも

思われてくる。朝鮮農民に理解を示した中国人地主や中国農民からすると恩を仇で返された理不尽さがあるだろう。またそこまでしないと生きていけない朝鮮農民の赤裸々な現実がある。それに比べると伊藤永之介「万宝山」はじつに薄っぺらなものである。

他方、張赫宙『幸福の民』は満州開拓朝鮮人が抱えている悲哀、自嘲、葛藤、欲望などを露骨に描いたもので、朝鮮農民の性質と性格が張赫宙特有のバルザック風のリアリズムで解剖されている。それに植民地的な現実と時代相が重く押し掛かっている。

張赫宙『曠野の乙女』も同じく朝鮮人満州開拓を扱った作品であるが、作品内容は国策の賛美ではなく、満州における朝鮮南部出身の民族右派と朝鮮北部出身の共産左派の葛藤と抗争によって満州開拓が挫折する話である。作中には

朝鮮戦争の原因となるすべての要素と葛藤が予見されており、南北分断は終戦状況ではなく、1930年代に満州で始まっていたことをよく示している。満州開拓における朝鮮農民の最大の障壁は中国農民ではなく、張一族軍閥政権でもなく、日本軍でもない。共産左派（いわゆる匪賊）と民族右派の殺し合いである。そうした事実が克明に描かれているのである。イデオロギーによって隣村と殺し合いを繰り返し、加害と被害で、一族と友人を失って孤立していく「曠野の乙女」の現実が赤裸々に描かれている。1941年の作品である。全く同じものが規模を大きくして起こったのが1950年の朝鮮戦争である。これまたリアリズム文学の成果なのであろう。

こうした一連の張赫宙による満州開拓小説は、一般に国策小説と言われているが、内容においては朝鮮農民が一方的に肯定されていないのである。日本側も一方的に肯定されていない。張赫宙文学がリアリズム文学である所以はこうした現実条件を前提にした人間理解と人間観察によるものである。それを可能にしたのは近代日本語であるというのが私の持論である。具体的には自然主義リアリズムであると思っている。

話がだいぶそれてしまったが、大村益夫訳の金学鉄短篇小説選が嬉しかったもう一つの理由はこれを機会にぜひ読んでおきたかったからである。一昨年、延辺出身の中国朝鮮族留学生の指導教員になり、卒論テーマに困っていた学生に、『中国朝鮮族アイデンティティ—金学鉄文学を視座に』というテーマを勧めたことがある。中国朝鮮族のアイデンティティを金学鉄の隻脚が象徴しているようにも思われ、「欠損」をキーワードにして探ってみようアドバイスした。しかし私自身は全く作品を読んでいなかった。日本語では読めない状態でもあった。致し方なく、指導学生が中国吉林からハングル本『激情時代』『二十世紀』を取り寄せて卒論を纏めたが、私は最後までそれらの長篇小説を読む時間と勇気がなかった。

まず北朝鮮や中国朝鮮族の朝鮮語は表記法や語彙や文章表現において南部朝鮮語である韓国語とだいぶ違って読みづらい。金学鉄の朝鮮語は朝鮮北部言語をベースにしているので語彙は難解であり、文体と表現技法は直情的で、感情はむき出しの状態である。韓国語・朝鮮語が全く分からない日本人には説明が難しいが、しいて例えれば、北朝鮮国营テレビニュースで独特の節をつけて原稿を読み上げる中高年女性アナウンサーの言葉を想像したほうが近いかもしれない。内容より情緒が先行する。それが私にはどうも情緒的刺激が強く、読むのが苦痛である。卒論執筆中の学生による朝鮮語引用文と日本語訳文からそれ

が直感的に感じられた。描写と記述が戦後イデオロギーで再構築されたもののように思われた。臭覚的に慣れた臭いであった。可能ならばイデオロギーで再構築された戦後の回顧録のようなものではなく、同時代的に書かれた戦前の短篇などを読んでみたかったのである。その時、ちょうどタイミングよく金学鉄短篇小説選が送られてきたのである。しかもそれを独特の節（臭い）を落とした近代日本語の翻訳文で読めるとは嬉しい。すぐに戦前の同時代的な作品があるかと探しながら日本語翻訳文を確認した。作品はすべて戦後のものであったが、翻訳のことも気になった。

じつは一昨年、私は「李箕永著・大村益夫訳『故郷』を読みながら」（『翻訳の文化／文化の翻訳』2018年3月）といった文章を書き、李箕永『故郷』訳を論じたことがあるので日本語訳がやや気になっていた。それでパラパラと読んだが、金学鉄短篇小説選は吸い込まれるような流麗な日本語であった。それで止まらない状態になり、『開墾』を一時中断したまま、ほぼ1日で読み終えた。原文からハングルが透けて見える直訳ではなく、明らかに再構築された日本語で、呼吸リズムにも合わせたじつに読みやすい日本語であった。日本語訳の苦勞が伝わった。おそらく原文はもっと複雑で、意味不明で、情緒的で、しばしば論理的に矛盾し、文体は入り乱れ、混沌としたものであったろう。それを丹念に拾い上げ、精査し、純化した日本語で化粧回しを施し、最も綺麗な状態で世に送り出していることが分かった。日本語訳でこれ以上の訳を求めることはほぼ不可能であろう。

しかし全体を読み終えるとなんと形容しがたい違和感のようなものが残る。もちろんそれは日本語訳の問題ではない。内容のことである。この一連の金学鉄の文章をどのように解釈していいのかわからなかった。むしろ問題は本文内容の分かりやすさであった。なにもかもが単純すぎるのである。図式的なイデオロギーと再構築された記憶の断片は存在しているが、そこに「文学」が存在していない印象を受けたのである。いちおう作品集の名前はたしかに「金学鉄文学選集」であり、「短篇小説集」であるが、私の感覚ではこれは「文学」ではなく、「短篇小説」でもない。正確に言えば「近代文学」ではなく「近代短篇小説」でもない。定義することのできないなものかを読んだ気分である。これには非常に困惑してしまった。

韓国では分断状況を乗り越える文学として金学鉄文学が注目され、あたかも朝鮮文学の最高傑作であり、偉大な文学遺産であるといった評価を以前から耳にしていた。そうした評価から学生の卒論としても勧めたのである。現に短篇

集の「跋文」で金在湧氏は「正典（正当な文献）」であるとも言っている。鉤括弧で「正典」とは「正当な文献」という意味まで明示して最高評価を下している。そうした評価と相俟って今回の翻訳企画が行われているのであろう。一個人の朝鮮語作家にこれほど纏まった形で日本語訳が刊行されるのはほぼ前例がない。以下、「金学鉄文学選集編集委員会」による刊行予定を紹介しておく。

第一集 『金学鉄短篇小説選』 翻訳担当・大村益夫

第二集 『二十世紀の神話』 翻訳担当・愛沢革

第三集 『激情時代』 上翻訳担当・鄭雅英

第四集 『激情時代』 下翻訳担当・鄭雅英

事務局担当・丁章

翻訳者と企画者の名前から日中韓の共同作業のような形式であろうか。第一集の「はしがき」は丁章氏によるもので、それに大村益夫「解説」と金在湧氏による「跋文」が添えられている。金在湧氏は「跋文」で「金学鉄の文学は韓国文学に深く浸透し、正典（正当な文献）とされるまでに至った」と評価していたが、これにはやや戸惑った。

おそらく金在湧氏は「正典（正当な文献）」という言葉の意味を宗教、たとえばキリスト教における聖書のような正しい経典（Scripture）に近い意味として使い、最高評価を下しているのであろう。しかし文芸批評における「正典（canon）」とは一般に権威性を持つ「偶像」に近い意味として使われる。既得権威で、批判対象を指すことが多いのである。だから金氏が自ら示しているように「韓国文学に深く浸透」することも可能なのである。もちろんこれはあくまでも文学文芸的な側面においての話である。

2 文学と政治もしくは神のものとカエサルのもの

正典から聖書を思い出すが、聖書には「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい」（マタイによる福音書）という有名な一句がある。きわめて世俗的・物質的なものと宗教的・精神的なものを明確に分離するイエスの言葉である。金学鉄短篇小説選を読んで最初に浮かんだのはこの言葉であった。私の違和感はこうした側面から発生している。それはまず金学鉄による文章を近代的な文学ジャンルとして分類することが難しかったことに起因する。なんと呼んでいいのか分からない。近代的文芸分類であるフィクションではない。

ノンフィクションでもない。しいて言えば、朝鮮半島に古い語り様式である身世打令にやや近いかもしれないと思った。

身世打令の基本構造は身の上話に節をつけたものだが、そこには近代的な「私」が存在しない。世界全体が私である。そのため、私＝世界全体と分離される他者や社会が存在しなくなる。自己と他者が分離できないのである。これによって近代的な内面が形成できず、そのため、客観的な事実描写（平面描写）や風景描写が欠落する。千篇一律化する。また他者が欠落しているので葛藤も存在しなくなる。自己中心的な解釈が存在するのみである。私が主人公になり、自己体験を述べているからいわゆる「私小説」になるのではない。自己の過去記憶を語り、経験や体験を書いているからノンフィクションになるのでもない。これは大きな誤解である。

日本の近代文学は私小説の平面描写や客観描写を基調とする自然主義文学の成果の上に成り立っている。詳しい説明は省くが、簡潔に言うと、「私小説」における私は作家自身ではない。「私」を名乗るもう一つの語り手としての私が黒子として存在すること、つまり登場人物である私を観察し、操り、コントロールし、客観的に批判する作品背後のもう一人の私（語り手）が存在して初めて近代小説となるのである。登場人物が三人称でもその原理は変わらない。三人称の背後に隠れ、それを動かし、客観的に批判し、それを操るといった神的な語り手（作家自身）が黒子として常に介入することで、描写と記述に近代的客観性が得られる。作中の私や三人称主人公は作家の操り人形に過ぎない。つまり、私小説は私と語り手の私を分離することで成り立ち、三人称とは登場人物（作家の分身）と語り手の私（作者自身）を分割することによって成り立っている。近代文学とはこの分離・分割作業の謂いである。これによって初めて客観的な描写が可能となる。こうした分離・分割作業によってようやく他者が生まれ、おのずと葛藤が生まれ、描写はリアリティーを獲得する。これが近代におけるリアリズム文学の本質である。これの未分離・未分割状況が前近代文学であり、そこでは自己が無限に拡張して世界と一体化し、他者と世界の領域がなくなる。世界は自己だけで充満する。これが身世打令の構造である。

こうした疑問を訳者の大村先生も多少抱いているようで、「解説・金学鉄―人と文学」では次のように指摘されている。

金学鉄の作品はすべて彼の実体験がもとになっている。作品中の地名・人名等に、実際の地名・人名等が使われる場合も多い。あるいは人名三文

字中、二文字を実名と同じくし一字を原音と近い音とする場合もある。それらは小説がノンフィクションに近いけれども、作者のフィクションが加わっていることを示しているだろう。

大村先生は曖昧に留めているが、たとえすべてを実名にしてもノンフィクションになることはないと思っている。同様にすべての実名を隠してもフィクションになることもない。固有名詞の有無がフィクションとノンフィクションを決める物差しではない。固有名詞が実名か仮名かはどうでもよいのである。葛藤と世界を描くもう一人の語り手として私（作家自身）が設定されなければいずれの領域（ジャンル）にも属しない。私の違和感はこちらに原因する。作中の主人公私（もしくは三人称）と語り手としての黒子の私が分離できずに一体化しているので、文章が実態（対象）を正確に捉えていないのである。

たとえば、表題作である「たばこスープ」は怠け者で、スープにタバコの葉っぱを入れるなど、とぼけてへまばかりする朝鮮義勇軍文丁三が日本の輜重兵3人をやっつけたエピソードを紹介したものである。行軍に遅れて祠堂の2階で寝ていたところ、ちょうどそこに日本の輜重兵が立ち寄ったため、文丁三は手榴弾で日本兵3人を殺し、輸送物資を鹵獲する大きな戦功を挙げている。しかし作品では一大事件であるはずの日本兵3人を殺害した場面描写にリアリティーがない。日本兵3人の殺害は文丁三の呆けた性格を表す一エピソードに過ぎない。事件を客観的に描写する語り手が存在しないのである。語り手が主人公文丁三と同化しているので描写の視点が存在しない。だから日本兵3人の死は主人公のとぼけた性格を浮き彫りにする道具（エピソード）に過ぎなくなる。そのため文丁三の戦功と日本兵3人の戦死の意味が深く掘り下げられることもない。

もうひとつ、「松濤」という短い作品がある。元山に住む主人公の朝鮮人少年宝鏡と中国人少年平児は幼馴染であるが、万宝山事件が起これ、日本人駐在所長のさしがねで平児の父が朝鮮人暴徒によって殺害される。さらに平児一家をかくまったことで宝鏡の父親も日本警官に殺害される。幼い二人は父親らが殺害されたのは日本帝国主義の謀略であることに気づき、友愛のしるしで、元山松濤にある松の大木に朝鮮語で「丕」と中国語で「中」をそれぞれ刻んで復讐を誓う。そのしばらく後、朝鮮戦争が勃発するが、二人はそれぞれ人民志願軍と朝鮮人民軍の連隊長となり、同じ時刻に元山松濤に立ち寄る。元山松濤の松の大木の下で偶然に再会した二人は帝国主義打倒を誓い合うという話である。

あたかも少年向けの国策コントのようである。万宝山事件の実態は大きく歪められ、抗日の単なる記号と化している。

作品冒頭で述べたように、この作品集を読んだのは張赫宙の長篇小説『開墾』を読んでいる最中であつた。万宝山事件を扱った『開墾』は二度に渡る満州開拓地視察の成果で、詳細な現地調査と聞き取り調査に基づいている。中国人地主、中国人農民への聞き取り調査がなければ描けないところも多く見受けられる。一つの事件を総体的に、鳥瞰的に描こうとしているのである。語り手が上空で見下ろしているかのように、関係者のすべての内面に入り込むような神的な視点で語っている。それは『幸福の民』『曠野の乙女』においても共通する。そのため国策小説としては甚だ歪なものになっているのである。国策小説としてのこうした不都合な結果は張赫宙の思想がそうさせたのではない。張赫宙が意図的に抗日や反日を図ったとは到底思えない。張赫宙文学の近代リアリズムがそうさせているのである。リアリズムの中で登場人物らがもっとも合理的に動き出した結果なのである。眼（調査）に留まるままに描写せざるを得ないからである。

金学鉄短篇小説選に違和感を覚えたので、中断した『開墾』を読み終えた後、



さっそく火野葦平の兵隊三部作を読んだ。類似した境遇で戦争をいかに描いたのかを比べてみたいと思ったからである。自ら陸軍伍長として従軍した火野葦平の体験と体験の描き方を比較してみるためであった。それで国策文学の最高峰と言われる『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』の初刊本を購入して読んだが、これには圧倒された。文章と感

覚は若い才能で溢れ、まさに当代きっての人気作家で実力者に相応しかつた。私自身の先入観が如何に酷かつたのか、すぐに気付かされた。描写は驚くほど客観的であつた。身の毛がよだつほどの客観性で、その冷静な描写からあたかも自分がその現場に居るようであつた。「皇軍」だからと書いていたずらに賛美することもない。中国軍だからといって無暗に軽蔑することもなく、殺害行為

を称賛し、正当化することもない。無数のカメラで敵と味方を隈なく写している。中国社会の混乱と中国人民の苦境が同時に火野葦平というカメラに拾い上げられる。当時の一大ベストセラーもこれからあまり読まれることがないと思われるが、『麦と兵隊』の最後の場面は日本軍による中国人捕虜虐殺が暗に批判的に描かれている。「批判的」というより作家という文学的カメラにそれが映ってしまったというのが正しいだろう。カメラは彼我に容赦がないのである。

また『花と兵隊』では主要登場人物で、私（陸軍伍長）と小隊で親しくしていた中国人使用人タクアンがスパイ容疑で憲兵隊に検挙されて処刑されるが、タクアン（本名は卓雲成）に対する私の理解は深い。追悼の思いが長く書き記されている。「私は卓雲成に対し、祖国のために一身を犠牲にする精神において、我々日本の兵隊に近いものを感じ、してやられた嬉しさのやうなものあつた」と評価し、立派な武士道行為として賞賛している。これも作品の最後の場面になっている。読み様によっては『花と兵隊』全体がタクアンこと卓雲成の追悼の物語と言えなくもない。敵だからいたずらに憎悪を發揮しているのではない。繰り返すが、これまた火野葦平の人徳がそうならしめたのではない。近代文学のリアリズムがそうさせるのである。自己と他者（世界）に起こる現象を正確に捉えようとした結果なのである。

火野葦平『麦と兵隊』における日本軍の捕虜虐殺、『花と兵隊』における間諜（スパイ）行為と憲兵隊による処刑（作品では処断）をわざわざ取り上げたのは、それが金学鉄の経歴と関連しているからである。金学鉄自身が日本軍の捕虜でもあり、八路軍の間諜（スパイ）でもあった。両方に該当しているのである。その運命がどうであったかは火野葦平の『麦と兵隊』『花と兵隊』を読むまでもない。それにしても火野葦平はなぜあの極めて不都合な場面を作品の最後にわざわざ入れたのだろうか。その答えは明確である。それがまさに近代文学の近代文学たる所以だからである。火野葦平が一流の近代作家である所以でもある。

年譜によると、金学鉄は日本軍の捕虜として捕らえられ、日本に護送され、長崎地方裁判所で治安維持法違反として10年の懲役刑となっている。植民地期の歴史に敏感な研究者は、日本軍に敵対するスパイ行為を行い、しかも銃創を負った戦争捕虜である金がなぜ保護され、一命が保全されたかを疑問に思うであろう。戦時捕虜であり、八路軍の間諜（スパイ）でもある金を北京から長崎地方裁判所まで護送し、裁判にかけ、しかも治安維持法違反で懲役十年刑とするのは、それ自体としては極めて珍しい。殆ど奇跡と言ってよい。なぜこのよ

うな奇跡が金の身に起こったのかを詮索するのは極めて不謹慎である。失礼になる。しかし金学鉄がもし近代文学者であるならばその詮索から免れない。なぜなら近代文学は客観的に自己を冷徹に分析して内省的に語らせるのを作家に求めるからである。しかし金学鉄文学にはこの核心部分が存在しない。もっとも重要な人生の分岐点において、生死の岐路に直面した懊悩と煩悶と恐怖と諦念などの、おそらく精神的に錯綜していたはずの決定的瞬間における心的場面が欠落しているのである。その経緯のごく一部は「囚人医師」「仇と友」に描かれているが、それは記憶の断片に過ぎず、前後に大きな空隙がある。

大村先生が期せずして、金学鉄の文章がノンフィクションでもなくフィクションでもない指摘をしたのはこれに原因すると思っている。いずれのジャンルでも形象化できるような文学的自己（文学的内面）が金には最初から存在していなかったのではないだろうか。だからフィクションとノンフィクションの間を曖昧に揺れながら核心には到達できない。必要に応じてフィクションになったりノンフィクションになったりする。再構築された記憶の断片が無造作に都合よく羅列されているに過ぎない。記憶とは精神医学的には現在の必要性によって再構築、再構成されると言われている。不要なものは埋没される。記憶が文学になるためには作家の文学的内面（文学的自己や文学的内省、reflection）を通してそれが再度凝結されなければならない。この点において金学鉄の文章は近代文学（少なくとも日本近代文学）とはやや性質が異なる。あるいはこの点が中国近代文学や朝鮮近代文学と日本近代文学の根源的な相違と隔たりなのかもしれない。

前述した「囚人医師」「仇と友」は日本人の友人を描いたものである。「仇と友」には3人の日本人友人が登場する。足を切断した医師（この人物は「囚人医師」でも描かれている）、刑務所での海軍少尉、そして全体の枠を包んでいる「早稲田大学の教授大村益夫先生」である。なんと大村先生と「夫人秋子女史」が最大の理解者として実名で小説に登場しているのである。大村先生ご自身もやや当惑したであろう。おそらく大村先生は金学鉄の日本に対する愛憎に満ちて矛盾した繊細な内奥に深い理解を示したであろう。あるいは金学鉄自身が大村先生には文章としては言い表せない自己の奥底を漏らしたかもしれないと推測している。「仇と友人」は二人のこうした友愛のしるしであろう。紛れもなく金学鉄自身の本音で、おそらく最大の感謝のしるしでもあったろう。他方でこうした次元の文章行為が金学鉄文学の本質的な性質をよく示してもいるのである。それがまた金学鉄が政治家であり、革命家であり、「不撓不屈の社会主義者」

(大村益夫・解説)である所以でもある。

金学鉄に反日文学や抗日文学の輝く伝統を読み取ることに私は聊か不安を感じる。抗日文学や抵抗文学というのは基本的にはもう一つの国策文学なのである。政治的な論理であり、政治的なポーズに過ぎないのである。国策文学や親日文学が非難される所以は必ずしもその思想性ではない。その思想性の文学的な幼稚さにある。内面の成熟した探検がないのである。同様のことはいわゆる抗日文学にも言えるのである。

おそらく金学鉄の一生は革命的神話を渴望する韓国近代史においては「青史に永遠と輝く」ものと評価されるであろう。それでよいと思う。しかし金学鉄の文章が文学的「正典」になることはないと思っている。それに相応しい文学的な成熟を伴っていないからである。章題で、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」という聖書の一句を引用したのはそうした意味である。

もちろん植民地期において数奇な運命を生きた金学鉄の闘争の記憶と記録が日本語訳で刊行されることはじつに喜ばしいことである。日本でも広く知られてほしいと願っている。そのためにも完結までの成功を祈るばかりである。大村訳に続くよい翻訳が待たれる。